

日立市立塙山小学校 教諭 東野 亜由未

- 1 派遣期日 令和5年11月25日(土)
- 2 派遣先 学校名(会場名) 明星学園小学校・中学校
所在地 東京都三鷹市井の頭5-7-7
http://www.myojogakuen.ed.jp/elementary_school

3 研修内容

(1) 視察校における研究への取り組み

公開研究会 「教科教育が担うものとは」

教科の研究を通じて、何を・どのような順序で・どのようにアプローチして教えるかを子供に寄り添いながら検討し、授業づくりに結実していく取り組みが明星学園の柱となっている。また、明星学園の授業は、「体験・対話・綴る・表現」を大切にしている。

(2) 公開授業(視察内容)

小学校総合科・算数科、小・中学校理科、中学校国語科、中学校保健体育科の公開授業の中から、小学校算数科の授業実践について視察した。

小学校・算数科研究主題

「生活から数の世界・そして数の世界から生活へ」

算数・数学の「やり方」を覚えて反復練習していくことはもちろんだが、算数の知識や思考方法を用いて、自分なりの答えを見つめられるように促していくことを大切にする。

ア 小学校4年生 算数科「小数のかけ算」

(ア) 単元名 小数のかけ算

(イ) 本時の目標 課題がかけ算であることに気づき、タイル図により 1.2×0.7 の積を見つけ、 $\times$ 真小数の場合は、積がもとの数よりも小さくなることを理解する。

(ウ) 学習課題

1dmの重さが1.2gのひもがあります。このテープ0.7dmの重さは何gか。

(エ) 授業の流れと児童・教師の発言

教師の動き・発問	児童の動き・発言
①課題を提示し、すぐに何算かを問う。 「それはなぜか、手がかりはあるか。」	①大半の児童がわり算。かけ算は小数。
②課題に赤・青線を引き、かけ算かわり算かをさらにゆさぶって考えさせる。	②・1つ当たり $\times$ いくつ分=全部の数 ・全部の数 $\div$ 1つ当たり=いくつ分 ・全部の数 $\div$ いくつ分=1つ当たり
③言葉の式を書いて確かめていくが、いろいろな意見が出てくるので、式がどうなるかも含めて自力解決へ進める。	④児童から出た考え ・1dmより0.7dmの方が小さいから答えは1.29よりも小さい数になるはず
④全体で練り上げる 「なぜ短いと軽いのか？」	・0.3dm分短いから1dm分よりも軽くなる ・全部の数が分からないから、 $\square \div 1.2 = 0.7$ で $1.2 \times 0.7 = 8.4$?
⑤かけ算にすると答えは大きくなるはずだし、わり算は小さくなるはずだが、今回はどうだろうか」と投げかけ、本時を閉じる。	・8.4? $1.2 < 8.4$ これでいいのかな?

イ 小学校6年生 算数科

(ア) 単元名 内包量と比例

(イ) 本時のねらい

6年間の身長伸びと時間(年)の比例関係を捉える。また、人間の身長伸び具合には限界があり、いつまでも比例的に伸びていくわけではないことにも気付く。身近な教材

から概念を獲得し、その概念を使って身近な生活を見つめていく。

(ウ) 学習課題

みんなの小学校6年間の身長伸び具合は比例しているのだろうか。

(エ) 授業の流れと児童・教師の発言

教師の動き・発問	児童の動き・発言
①入学式の写真を見せて、課題を問う。	①恥ずかしい、懐かしい、小さい。
②1・6年生の身長が書かれた個人データを配付する。	②グラフがほしい。
③中学3年生(3年後)の自分の身長は何cmぐらいになるか計算しよう。 検討がついたかについていないか問う。	③求める式は・・・ 6年生－1年生＝5年間の伸び 5年間の伸び÷5年間＝1年間の伸び 1年間の伸び×3年分＝3年間の伸び 6年生の身長＋3年分の伸び＝3年生の身長
④5年間の伸び具合が書かれた個人データを配付する。 「実際の伸び具合と自分が作ったグラフを比べてみよう。」	④グラフを書いたらガタガタだった。
⑤児童の発言に切り返して深めていく。 ・「ガタガタってどういうこと？」 ・「なぜかな？」 ・「どういうこと？」	⑤・一定ではないということ。 ・2～3年はグラフの傾きが急に上がっている、3～4年生では下がっている。 ・コロナ化で、身長を測った時期がいつもと違う。
⑥このグラフをもとにすると40才では何cmになるか問い比例の意味を考えさせる。	⑥絶対違う。うちのお母さん20才までしか伸びなかったって言ってた。比例のグラフは続かないんだね。
⑦生涯の成長曲線グラフを見せ本時を閉じる。	⑦小学生の間はほぼ比例的に伸びるんだね。

(3) 全体会 (講師の話を抜粋)

特別講師 内田 樹氏

武道科、思想家。神戸女学院大学名誉教授、昭和大学理事。近著に「レヴィナスの時間論」、共著に「大学と教育の未来」「下り坂のニッポンの幸福論」など多数

- ・つぶやく声を丁寧に拾う。小さな声でささやくような声が響き合う教室にしたい。思いついたから手を挙げるのではなく、今出ているセンテンスをつぶやくことができる、それが例え小さな声でも、間違えても、途中でも許される教室環境を大切にする。
- ・教師もどのような声で子供に語りかけるかを考える。教師自身もつぶやくように話したり、絶句したりすることが大切である。届く声とは、口以外の他の身体部位も動く。(自分も納得して話している時)それを意識して子供たちと対話したい。
- ・不登校者が増加している現状である。無条件にまずは学校に来てと、子供の生命を守ったり成長を守ったりするために学校をあるのだと語りかけ続けたい。
- ・キャリア形成を促すことの重要性について考え直したい。将来の夢を「考えろ」「決めろ」ではない。「助けて」という呼び声(自分にだけ聞こえる救難信号)に気づけるか、そこから人は天職に出会う。頭を良くする、何かが優れていることよりも救難信号を聞き取れる「感受性」を育てたい。

4 感想

子供たちがさらに深く考えるきっかけをつくるためには、教師の切り返しがとても重要であると改めて考えることができた。子供が発言した際、すかさずその根拠を問い、ゆさぶることで子供たちの思考が動くことを授業視察を通して実感した。また、比例関係のように算数・数学を学ぶ意味を実感できるよう、生活に結びついた算数・数学の授業検討・教材準備が重要であると考えさせられた。今後もよりよい授業ができるよう積極的に研修や研究に努めていきたい。